

東南アジア史学会会報

1993年5月

第58号

目 次

1992年度秋季会員総会摘録	(1)
第14期第1回委員会摘録	(2)
第14期第2回委員会摘録	(3)
1992年東南アジア史学会会計中間報告	(4)

第48回研究大会報告

プログラム	(5)
自由研究発表要旨	
ラーマ3世期のタイ仏教僧団—中央部の設立をめぐって	山田 均 (5)
古典ジャワ文学にみられる伝統的歴史観	青山 亨 (6)
周縁的エスニシティの創出—タイ・マレーシア国境のサムサムの事例から	西井 凉子 (7)
バジョオ(海の民)のネットワーク	松澤 賢彦 (8)
シンポジウム「東南アジアにおける宗教と国民統合」報告要旨	
ビルマと仏教	田村 克巳 (9)
タイ族と仏教—雲南南部の宗教問題	長谷川 清 (9)
フィリピン・ムスリムの国民統合問題と宗教	川島 緑 (10)
イスラーム教育と国民統合	西村 重夫 (10)
伝統というパラドックス一分類体系の国家的起源	福島 真人 (11)
特別講演要旨	
National Integration of the Orang Asli in the Malaysian Islamic Context	Hood Mohamad Salleh (12)

資料・研究短報

日本輸出陶磁バンテン国際セミナー(1992年10月15日～19日)に参加して	青柳 洋治 (13)
日本・東南アジア関係史研究の最近の潮流—シンポジウム等参加報告—	後藤 乾一 (15)
地区例会・研究会活動状況	(17)
新入会員等	(19)

東南アジア史学会会報

1993年5月

第58号

目 次

1992年度秋季会員総会摘録	(1)
第14期第1回委員会摘録	(2)
第14期第2回委員会摘録	(3)
1992年東南アジア史学会会計中間報告	(4)

第48回研究大会報告

プログラム	(5)
自由研究発表要旨	
ラーマ3世期のタイ仏教僧団—中央部の設立をめぐって	山田 均 (5)
古典ジャワ文学にみられる伝統的歴史観	青山 亨 (6)
周縁的エスニシティの創出—タイ・マレーシア国境のサムサムの事例から	西井 凉子 (7)
バジョオ(海の民)のネットワーク	松澤 賢彦 (8)
シンポジウム「東南アジアにおける宗教と国民統合」報告要旨	
ビルマと仏教	田村 克巳 (9)
タイ族と仏教—雲南南部の宗教問題	長谷川 清 (9)
フィリピン・ムスリムの国民統合問題と宗教	川島 緑 (10)
イスラーム教育と国民統合	西村 重夫 (10)
伝統というパラドックス一分類体系の国家的起源	福島 真人 (11)
特別講演要旨	
National Integration of the Orang Asli in the Malaysian Islamic Context	Hood Mohamad Salleh (12)

資料・研究短報

日本輸出陶磁バンテン国際セミナー(1992年10月15日～19日)に参加して	青柳 洋治 (13)
日本・東南アジア関係史研究の最近の潮流—シンポジウム等参加報告—	後藤 乾一 (15)
地区例会・研究会活動状況	(17)
新入会員等	(19)

1992年度秋季会員総会摘録

1992年度秋季会員総会が、12月6日加納良啓会員を議長として千里ライフサイエンス・センターで開催され、次の議事をはかった。

〈報告事項〉

1. 寺田庶務委員より11月30日現在での会員総数は381名であること。会員名簿の改訂作業を進めており、会員には93年5月に送付する予定であるとの報告があった。
2. 奥平会計委員より、1992年度会計中間報告があった。
3. 桃木編集委員より『東南アジア—歴史と文化—』の編集等について報告があった。
4. 前田大会委員より、1992年秋季大会の準備について報告があった。
5. 各地区委員より、研究会の開催状況について報告があった。

〈審議事項〉

1. 石澤会長、および奥平会計委員より、学会の財政が逼迫しており、会費の改訂をしたい旨の問題提起があった。近年、土日に国公立大学等を大会会場として利用することが困難になりつつあり、外部施設を利用する場合には高額の会場費が見込まれる。また学会誌もますます充実しつつあり、その出版費用が上昇傾向にあるほか、会報印刷費の上昇などに対処するために、現行の学生会員年額5500円、一般会員6000円の会費を改訂したい。その際にはより多くの学生会員の入会を期待し、また一般会員会費との差を有意味なものとし、かつ会計事務上の繁雑さを回避するために5000円とし、一般会員については7000円としたいとの提案があった。

この提案に対して寺田庶務委員から、今回の改訂は従来通りの学会活動を継続するための最小限の改訂であり、会報に出版社の広告を掲載するなどして、さらに経費節減の努力をあわせて行いたいと述べられた。また、今回の改訂により向こう数年間は乗りきれる見通しだが、その後についてはさらに検討する余地があるとも述べられた。

これについて慎重に審議された結果、原案通り承認された。これにより1994年度より、学生会員の会費を5000円、一般会員の会費を7000円とすることになった。

2. 古田大会委員より1993年春季大会を6月5日と6日の2日間、北海道大学で開催したいとの提案があり、承認された。

第14期第1回委員会摘録

1992年6月13—14日の両日、東京大学山上会館で、寺田庶務委員が議長となり審議した。議事に先立ち、石澤会長よりのあいさつ、新委員の紹介があった。

報告事項は下記の通り。

- (1) 寺田庶務委員より、第47回研究大会の準備、会員総数が380名になったこと、会員名簿の改訂作業を92年秋より開始する予定であるとの報告があった。
- (2) 奥平会計委員より、研究助成基金の果実より今大会発表者の中澤政樹氏に旅費の一部を支給するとの報告があった。
- (3) 池端編集委員より、会誌『東南アジア—歴史と文化』第21号の刊行についての報告があった。
- (4) 加納および古田大会委員より、第14期の研究大会会場およびシンポジウムのテーマ(案)についての報告があり、92年秋季は大阪外国语大学、93年春季は北海道大学、93年秋季は静岡県立大学が開催校となる予定との報告があった。
- (5) 石井涉外・学術情報顧問より、第13回国際アジア歴史学者会議(IAHA)が94年9月に東京で開催される予定との報告があった。
- (6) 植村中国・四国地区、黒田関西地区、伊東中部地区、鳴尾関東地区委員より、それぞれ研究会等の活動報告があった。

審議事項は下記の通り。

- (1) 深見会計委員(第13期)より、91年度会計報告があり、承認された。
- (2) 吉川会計監査委員より、91年度会計監査報告があり、承認された。
- (3) 大会委員より、92年秋季大会のシンポジウムのテーマとして、「宗教と国民統合」が提案され、審議ののち承認された。また、93年春季のテーマとして「東南アジアにとっての中国」、同秋季には現代政治あるいは国際関係にかかわるテーマを考慮中であることが述べられた。
- (4) 池端編集委員より、学会誌『東南アジア—歴史と文化』21号の誌代値上げ、文献目録基準の再検討、著者名のローマ字表記のありかたについて問題が提起され、審議ののち承認された。
- (5) 学会の財政状況にかかわる問題が多方面から検討された。主な論点は以下の通り。土日に国公立大学等を会場として利用することが困難になりつつあり、外部の施設を利用する場合には高額の会場費が必要となる。会場費の負担を軽減するために出席者から大会参加費または会場費を徴収することを考えてもよいのではないか。大会会場費に加えて、会誌、会報の製作コストの上昇に対処するために学会費の改訂を考慮する必要がある。現在、学生会員と一般会員の会費の差額は500円であるが、それについても再考する必要がある。次回の委員会までに会計委員に会費改訂問題の基礎資料を作成してもらう。

第14期第2回委員会摘録

1992年12月5—6日の両日、千里ライフサイエンス・センター内会議室で、寺田庶務委員が議長となり、各委員の報告があったほか、会員名簿のフロッピーによる配布の件、会費の改訂をはじめとする総会案件について審議した。審議事項は下記の通り。

- (1) 会員名簿をフロッピーディスクによって配布する可能性については、フロッピーメディア、コピーにかかる技術的な問題があり、今後の課題とすることになった。
- (2) 学会の財政が逼迫していることから、会費の改訂問題について審議した。近年、土日に国公立大学等を大会会場として利用することが困難になりつつあり、外部施設を利用する場合には高額の会場費が見込まれる。学会誌もますます充実しつつありその出版費用が上昇している。会報印刷費の上昇などもあり、こうした経費の増大に対処するために、現行の学生会員年額5500円、一般会員6000円の会費をそれぞれ5000円と7000円に改訂したい。学生会費を値下げするのはより多くの学生会員の入会が期待されること、同時に一般会員との差を有意味なものとし、会計事務上の繁雑さを回避するためであることが提起された。この改訂案に対して、学会全体の会計状況を資料とともに慎重に審議した結果、改訂はやむをえないと判断し、総会案件としてとりあげることにした。

1992年度会計中間報告

1992年1月1日～12月2日

会計委員 奥平龍二（但し、1992年秋季大会関係費用を含まず）

1992年12月6日

I. 収入の部		円	III. 残額		円
1. 会員会費（のべ144名）	850,500		収入合計	2,124,055	
2. 預貯金利子	11,057		支出合計	2,107,653	
3. 会誌学会在庫売上	8,800				16,402
4. 業績目録売上	3,200				
5. 業績目録（補遺）売上	3,200				
6. 前年度繰越金	1,247,298				
以上合計	2,124,055				
II. 支出の部		円	1992年度研究助成基金中間報告 (1992年1月1日～12月2日) (但し、1992年秋季大会関係費用を含ま ず)		
1. 会誌関係			1992年12月6日		
(1) 誌代（385冊）	1,201,200				
(2) 編集費	136,309				
小計	1,337,509				
2. 会報関係					
(1) 作成費	239,887		I. 収入の部		
(2) 郵送費	55,230		円		
小計	295,117		新規寄付（計4口）		
3. 大会関係			40,000		
(1) 大会予報費	17,374		預貯金利子		
(2) プログラム等			110,901		
作成・郵送費	127,310		前年度繰越金		
(3) 運営費	243,408		2,930,010		
小計	388,092		以上合計		
4. 委員会・事務局関係費			3,080,911		
(1) 交通・通信費	38,672		II. 支出の部		
(2) 消耗品費	48,263		円		
小計	86,935		助成金交付		
以上合計	2,107,653		10,235		

第48回研究大会報告

東南アジア史学会第48回研究大会（大会準備委員長・吉川利治氏）は1992年12月5日と6日の両日、千里ライフサイエンス・センターで開催され、百数十名の参加を得て盛会となった。プログラム、自由研究発表、シンポジウムおよび特別講演の要旨は以下の通りである。

12月5日(土)

13:30 開会の辞

大会準備委員長（大阪外国語大学）吉川利治
自由研究発表

13:40 ラーマ3世期のタイ仏教僧団一中央部の設立をめぐって

（日本学術振興会特別研究員）山田 均

14:20 古典ジャワ文学にみられる伝統的歴史観（シドニー大学大学院）青山 亨

15:15 周縁的エスニシティの創出—タイ・マレーシア国境のサムサムの事例から

（日本学術振興会特別研究員）西井涼子

15:55 バジョオ（海の民）のネットワーク

（上智大学大学院）松澤賢彦

特別講演

16:35 National Integration of the Orang Asli in the Malaysian Islamic Context

（マレーシア国民大学・京都大学東南アジア研究センター客員研究員）

Hood Mohamad Salleh

12月6日(日)

シンポジウム〈東南アジアにおける宗教と国民統合〉

9:30 趣旨説明（京都大学）前田成文

9:40 ビルマと仏教（国立民族学博物館）田村克巳

10:20 タイ族と仏教—雲南南部の宗教問題（聖徳学園岐阜教育大学）長谷川清

11:00 フィリピン・ムスリムの国民統合問題と宗教（東京大学大学院）川島 緑

11:40 イスラーム教育と国民統合（京都大学）西村重夫

12:20 昼 食（委員会）

13:30 会員総会

14:30 伝統というパラドックス一分類体系の国家的起源（東京大学）福島真人

15:10 総合討論（司会）（東京大学）古田元夫

（天理大学）弘末雅士

16:45 閉会の辞 会長（上智大学）石澤良昭

自由研究発表要旨

ラーマ3世期のタイ仏教僧団一中央部の設立をめぐって—

山田 均

1835年にラーマ3世はバンコック城内に位置する寺院をまとめて、中央部という新しい組織を定めた。中央部部長にはチェートゥポン寺寺長のヌチットチノーロット親

第48回研究大会報告

東南アジア史学会第48回研究大会（大会準備委員長・吉川利治氏）は1992年12月5日と6日の両日、千里ライフサイエンス・センターで開催され、百数十名の参加を得て盛会となった。プログラム、自由研究発表、シンポジウムおよび特別講演の要旨は以下の通りである。

12月5日(土)

13:30 開会の辞

大会準備委員長（大阪外国語大学）吉川利治
自由研究発表

13:40 ラーマ3世期のタイ仏教僧団一中央部の設立をめぐって

（日本学術振興会特別研究員）山田 均

14:20 古典ジャワ文学にみられる伝統的歴史観（シドニー大学大学院）青山 亨

15:15 周縁的エスニシティの創出—タイ・マレーシア国境のサムサムの事例から

（日本学術振興会特別研究員）西井涼子

15:55 バジョオ（海の民）のネットワーク

（上智大学大学院）松澤賢彦

特別講演

16:35 National Integration of the Orang Asli in the Malaysian Islamic Context

（マレーシア国民大学・京都大学東南アジア研究センター客員研究員）

Hood Mohamad Salleh

12月6日(日)

シンポジウム〈東南アジアにおける宗教と国民統合〉

9:30 趣旨説明（京都大学）前田成文

9:40 ビルマと仏教（国立民族学博物館）田村克巳

10:20 タイ族と仏教—雲南南部の宗教問題（聖徳学園岐阜教育大学）長谷川清

11:00 フィリピン・ムスリムの国民統合問題と宗教（東京大学大学院）川島 緑

11:40 イスラーム教育と国民統合（京都大学）西村重夫

12:20 昼 食（委員会）

13:30 会員総会

14:30 伝統というパラドックス一分類体系の国家的起源（東京大学）福島真人

15:10 総合討論（司会）（東京大学）古田元夫

（天理大学）弘末雅士

16:45 閉会の辞 会長（上智大学）石澤良昭

自由研究発表要旨

ラーマ3世期のタイ仏教僧団一中央部の設立をめぐって—

山田 均

1835年にラーマ3世はバンコック城内に位置する寺院をまとめて、中央部という新しい組織を定めた。中央部部長にはチェートゥポン寺寺長のヌチットチノーロット親

第48回研究大会報告

東南アジア史学会第48回研究大会（大会準備委員長・吉川利治氏）は1992年12月5日と6日の両日、千里ライフサイエンス・センターで開催され、百数十名の参加を得て盛会となった。プログラム、自由研究発表、シンポジウムおよび特別講演の要旨は以下の通りである。

12月5日(土)

13:30 開会の辞

大会準備委員長（大阪外国語大学）吉川利治
自由研究発表

13:40 ラーマ3世期のタイ仏教僧団一中央部の設立をめぐって

（日本学術振興会特別研究員）山田 均

14:20 古典ジャワ文学にみられる伝統的歴史観（シドニー大学大学院）青山 亨

15:15 周縁的エスニシティの創出—タイ・マレーシア国境のサムサムの事例から

（日本学術振興会特別研究員）西井涼子

15:55 バジョオ（海の民）のネットワーク

（上智大学大学院）松澤賢彦

特別講演

16:35 National Integration of the Orang Asli in the Malaysian Islamic Context

（マレーシア国民大学・京都大学東南アジア研究センター客員研究員）

Hood Mohamad Salleh

12月6日(日)

シンポジウム〈東南アジアにおける宗教と国民統合〉

9:30 趣旨説明（京都大学）前田成文

9:40 ビルマと仏教（国立民族学博物館）田村克巳

10:20 タイ族と仏教—雲南南部の宗教問題（聖徳学園岐阜教育大学）長谷川清

11:00 フィリピン・ムスリムの国民統合問題と宗教（東京大学大学院）川島 緑

11:40 イスラーム教育と国民統合（京都大学）西村重夫

12:20 昼 食（委員会）

13:30 会員総会

14:30 伝統というパラドックス一分類体系の国家的起源（東京大学）福島真人

15:10 総合討論（司会）（東京大学）古田元夫

（天理大学）弘末雅士

16:45 閉会の辞 会長（上智大学）石澤良昭

自由研究発表要旨

ラーマ3世期のタイ仏教僧団一中央部の設立をめぐって—

山田 均

1835年にラーマ3世はバンコック城内に位置する寺院をまとめて、中央部という新しい組織を定めた。中央部部長にはチェートゥポン寺寺長のヌチットチノーロット親

王が任せられた。翌1836年には当時郊外のサモーライ寺で仏教の原典回帰運動を主宰していたワチラヤーン比丘（後のラーマ4世）が王立寺院ボウォーンニウェート寺に寺長として招かれ、さらに副王に準じた待遇を受けることになった。本発表はこの一連の人事を分析して、当時の僧団の性質を明らかにするものである。

第1に、ヌチットチノーロット親王の部長就任は、ラーマ2世期以来、王権が僧団内部にまで力を延ばしてきたことの延長線上にある事件ととらえられる。

第2に、ワチラヤーン比丘の王立寺院寺長就任も、中央部が王権によって支えられているという性質をさらに明確にするものであり、後に法王パワレーサワリヤーロンコーン親王となるパンヤー・アッカ比丘が同時にプラ・ラーチャーカナ位に任せられたのも同様の性質の事件である。

第3に、ワチラヤーン比丘が副王に準じる待遇を受けたことは、当時の宮廷内事情による。すなわち、1832年の副王死去にともない、宮廷内部には副王の地位をめぐる思惑が渦巻いていた。ラーマ3世がワチラヤーン比丘に副王の待遇を与えたことは他の王族とくにイッサレートランサン親王に対する牽制の人事であった。

王権に近い僧団、中央部が設立されたことから、その後に続くランカー僧団との交渉や三蔵經の校訂などに王族の僧が果たす役割が大きくなり、ラーマ4世期以後の僧団においては王族の僧による強い指導が行われるようになった。また、ワチラヤーン比丘の地位が公認されたことで、彼が主宰するタンマユット運動は展開地点を迎え、僧団の事業に中心的に関わって行くことになった。

古典ジャワ文学にみられる伝統的歴史観——青山　享

古典ジャワ文学作品の多くは様々な形でジャワの過去を取り扱っているが、これまで主として史料としての有用性のみが問われてきた結果、ともすればその歴史的客觀性の欠如だけが強調される傾向があった。しかし、作品を史料として利用する場合はもとより、ジャワ文化自体を理解するためにも、ジャワ人自身の伝統的歴史観そのものを十全に理解する必要がある。そのために、本報告では、理解に必須の基本的概念を再検討した後、とくに「語られた世界」と「読み手の世界」という視点から代表的な作品を分析して、読み手のジャワ人達の脳裏に共有されていたであろう「過去世界」の再構成を試み、ジャワ的歴史観がそこにどのように反映しているかを明かにしたい。

古典ジャワ文献を「史書」とそれ以外のテクストに一律に分けることはできない。なぜなら、「過去」は「文学」、「ワヤン」、「予言」あるいは「系譜」といった様々なジャンルや叙述の形式に跨がって語られうる事象だからである。言い換えれば、古典ジャワ文学において「過去」の本質は「語られた世界」にあり、それと「読み手の世界」である現在からの距離の遠近で物語の「歴史性」が決る。したがって、一つのテクストに「歴史」的・「非歴史」的な部分が混在することも異常ではない。そしてこのようなテクストにおいて「系譜」や「予言」が「語られた世界」と「読み手の世界」を結び付けるための仕掛けとして機能している。

王が任せられた。翌1836年には当時郊外のサモーライ寺で仏教の原典回帰運動を主宰していたワチラヤーン比丘（後のラーマ4世）が王立寺院ボウォーンニウェート寺に寺長として招かれ、さらに副王に準じた待遇を受けることになった。本発表はこの一連の人事を分析して、当時の僧団の性質を明らかにするものである。

第1に、ヌチットチノーロット親王の部長就任は、ラーマ2世期以来、王権が僧団内部にまで力を延ばしてきたことの延長線上にある事件ととらえられる。

第2に、ワチラヤーン比丘の王立寺院寺長就任も、中央部が王権によって支えられているという性質をさらに明確にするものであり、後に法王パワレーサワリヤーロンコーン親王となるパンヤー・アッカ比丘が同時にプラ・ラーチャーカナ位に任せられたのも同様の性質の事件である。

第3に、ワチラヤーン比丘が副王に準じる待遇を受けたことは、当時の宮廷内事情による。すなわち、1832年の副王死去にともない、宮廷内部には副王の地位をめぐる思惑が渦巻いていた。ラーマ3世がワチラヤーン比丘に副王の待遇を与えたことは他の王族とくにイッサレートランサン親王に対する牽制の人事であった。

王権に近い僧団、中央部が設立されたことから、その後に続くランカー僧団との交渉や三蔵經の校訂などに王族の僧が果たす役割が大きくなり、ラーマ4世期以後の僧団においては王族の僧による強い指導が行われるようになった。また、ワチラヤーン比丘の地位が公認されたことで、彼が主宰するタンマユット運動は展開地点を迎え、僧団の事業に中心的に関わって行くことになった。

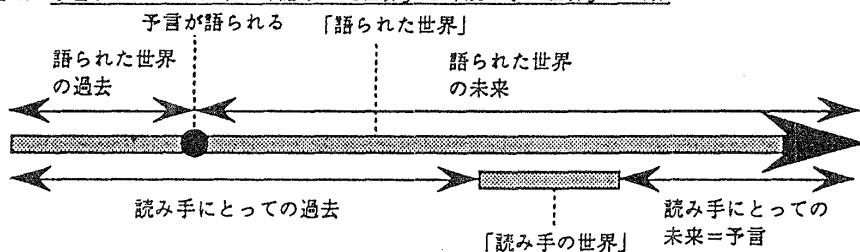
古典ジャワ文学にみられる伝統的歴史観——青山　享

古典ジャワ文学作品の多くは様々な形でジャワの過去を取り扱っているが、これまで主として史料としての有用性のみが問われてきた結果、ともすればその歴史的客觀性の欠如だけが強調される傾向があった。しかし、作品を史料として利用する場合はもとより、ジャワ文化自体を理解するためにも、ジャワ人自身の伝統的歴史観そのものを十全に理解する必要がある。そのために、本報告では、理解に必須の基本的概念を再検討した後、とくに「語られた世界」と「読み手の世界」という視点から代表的な作品を分析して、読み手のジャワ人達の脳裏に共有されていたであろう「過去世界」の再構成を試み、ジャワ的歴史観がそこにどのように反映しているかを明かにしたい。

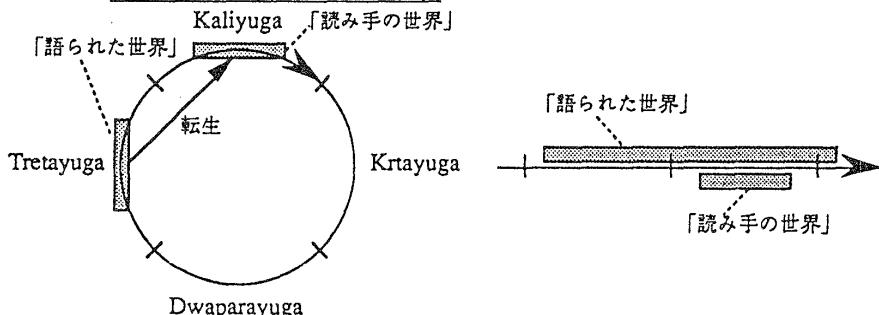
古典ジャワ文献を「史書」とそれ以外のテクストに一律に分けることはできない。なぜなら、「過去」は「文学」、「ワヤン」、「予言」あるいは「系譜」といった様々なジャンルや叙述の形式に跨がって語られうる事象だからである。言い換えれば、古典ジャワ文学において「過去」の本質は「語られた世界」にあり、それと「読み手の世界」である現在からの距離の遠近で物語の「歴史性」が決る。したがって、一つのテクストに「歴史」的・「非歴史」的な部分が混在することも異常ではない。そしてこのようなテクストにおいて「系譜」や「予言」が「語られた世界」と「読み手の世界」を結び付けるための仕掛けとして機能している。

古ジャワ語文学作品、17世紀頃の物語集と Babad Tanah Jawi、19世紀のワヤン物語集と予言書に語られている「過去」を比較してみると、一方で、ヒンドゥー期にすでに「直線的かつ段階的历史」観が顕著であり、これがイスラム期に受け継がれたこと、他方で、イスラム期の作品に系譜の普遍的連続性を強調するものが現れることや、「过去世界」の姿が单一の大國支配から複数の小国分立へ変移していくことなどが観察される。これらのことから、一般的に、ヒンドゥーからイスラムへという支配的世界観の交替に応じて文学における「語られた世界」と「読み手の世界」の関係もまた変化したと推測できる。

参考図1. 予言テクストにおける「語られた世界」と「読み手の世界」の関係



参考図2. ヒンドゥー的歴史とイスラム的歴史



周縁的エスニシティの創出と変容—タイ・マレーシア国境のサムサムの事例から—

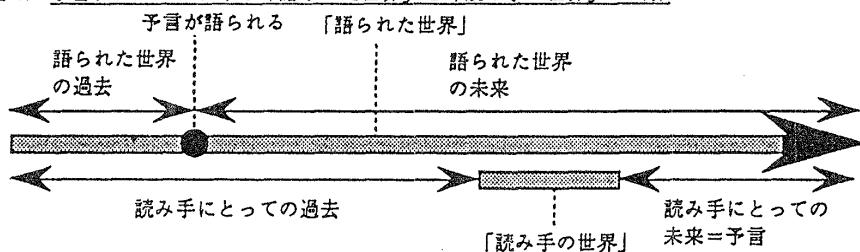
西井 凉子

本報告は地理的にも文化的にもタイとマレーのはざまに位置する「サムサム (Sam Sam)」と呼ばれる人々が、その境界的特徴ゆえに周縁性を付与され、変容していく過程を検討することにより、公的な国家間の関係では見えにくい民衆の営みにみられるタイ・マレー関係の一つの側面を明らかにしようとする試みである。サムサムはマレー半島中部の西海岸の国境地帯、現在のタイのサトゥーン県とマレーシアのケダ州及びプルリス州にわたって居住している「タイ語を話すムスリム」である。サムサムは宗教と言語によるエスニシティ規定では、タイ語を話す仏教徒であるタイ人と、マレー語を話すムスリムであるマレー人の境界領域に位置する。

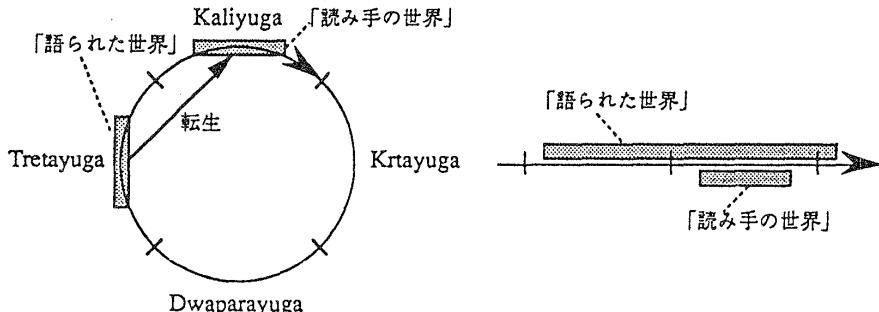
本報告においては、19世紀以降のイギリス人植民地官僚等の記録及び20世紀後半以降の研究に見られる外からみたサムサム像と、現在のサムサム社会の中で語られる

古ジャワ語文学作品、17世紀頃の物語集と Babad Tanah Jawi、19世紀のワヤン物語集と予言書に語られている「過去」を比較してみると、一方で、ヒンドゥー期にすでに「直線的かつ段階的历史」観が顕著であり、これがイスラム期に受け継がれたこと、他方で、イスラム期の作品に系譜の普遍的連続性を強調するものが現れることや、「过去世界」の姿が单一の大國支配から複数の小国分立へ変移していくことなどが観察される。これらのことから、一般的に、ヒンドゥーからイスラムへという支配的世界観の交替に応じて文学における「語られた世界」と「読み手の世界」の関係もまた変化したと推測できる。

参考図1. 予言テクストにおける「語られた世界」と「読み手の世界」の関係



参考図2. ヒンドゥー的歴史とイスラム的歴史



周縁的エスニシティの創出と変容—タイ・マレーシア国境のサムサムの事例から—

西井 凉子

本報告は地理的にも文化的にもタイとマレーのはざまに位置する「サムサム (Sam Sam)」と呼ばれる人々が、その境界的特徴ゆえに周縁性を付与され、変容していく過程を検討することにより、公的な国家間の関係では見えにくい民衆の営みにみられるタイ・マレー関係の一つの側面を明らかにしようとする試みである。サムサムはマレ半島中部の西海岸の国境地帯、現在のタイのサトゥーン県とマレーシアのケダ州及びプルリス州にわたって居住している「タイ語を話すムスリム」である。サムサムは宗教と言語によるエスニシティ規定では、タイ語を話す仏教徒であるタイ人と、マレー語を話すムスリムであるマレー人の境界領域に位置する。

本報告においては、19世紀以降のイギリス人植民地官僚等の記録及び20世紀後半以降の研究に見られる外からみたサムサム像と、現在のサムサム社会の中で語られる

内からのサムサム像を対置して検討することにより、「サムサム」が自己規定ではなくマレー語を話すムスリムによる他者規定であったことを明らかにしたい。それはサムサムに周縁性を付与することによってイスラム世界の中からタイ的な要素を排除し、マレー世界を防衛しようとする民衆レベルのマレー・イデオロギーのあらわれと考えることができる。

現在のタイ語を話すムスリムは、タイにおいてはイスラム教を信仰するタイ国民としてタイ国家に統合され、マレーシアではここ30年ほどの間にタイ語を放棄してマレー語化をすすめて完全なマレー人となろうとしており、全く別の方向へと進んでいる。周縁的エスニシティとしてのサムサムの記憶は標準タイ語を理解できず、書き言葉としてのタイ語を持たないマレーシア側のサムサムの中にこそとどめられている。周縁的エスニシティはマレーシアという国民国家のもとで制度的に固定化されることにより、実態的なサムサムの消失化の過程をたどっている。それはサムサムの変容の過程のみならずケダーにおけるマレー・エスニシティの変容の過程でもある。

バジョオのネットワーク—海の民の伝統化と周縁化——松澤 賢彦

本報告は、バジョオの「伝統化」と周縁化、そして、バジョオが海に広げたネットワークを中心に発表する。その際、インドネシア、東南スラウェシ州、ブトン県、鍛治屋列島にあるバジョオ集落滞在の記録をつきあわせつつ報告を行う。

バジョオと呼ばれる人々は、かつては船を家として、現在多くが海上に集落を形成し、海の暮らしに執着している。彼らの集落は東インドネシア、ボルネオ島、スルー諸島などに散在するが、小規模単位で集落を形成するために当該地域で民族上の少數者の立場に置かれる。「漂海民」「海の放浪者」として陸に住む住民から蔑まされることもある。

植民地化以前から、バジョオは海上に集落を形成し、遠洋航海、海賊など家船民では把握しきれない姿があった。ところが植民地支配が始まると「漂海民」像を裏付ける家船民、海上生活民に収斂、固定化していく。まず、この「伝統化」の過程を植民地支配との関連から検討をおこなう。バジョオが植民地支配を回避する活動を行った結果、植民地支配の側からは海の放浪者とされ、周縁の民となった。国民国家の時代も、取り残された人々として彼らの立場は変わらない。

しかし、各地に分散したバジョオ集団が取り残された人々でありながらも、海の民として「伝統」や統合性を維持できるのは、何よりもバジョオが海に張り巡らしたネットワークの存在である。鍛治屋列島のバジョオ諸集落を例に検討を加えるが、このネットワークの基本型はふたつの対なる旗（ウラ・ウラ）を持つ集団を母村とし、ふたつの母村が一対をなして結び付き、バジョオの部分社会を構成することにある。スラウェシ南部を範囲とすればバジョオのウラ・ウラ・ネットワークは重複する「母村一分村」関係が境界なく並存する状態となる。

内からのサムサム像を対置して検討することにより、「サムサム」が自己規定ではなくマレー語を話すムスリムによる他者規定であったことを明らかにしたい。それはサムサムに周縁性を付与することによってイスラム世界の中からタイ的な要素を排除し、マレー世界を防衛しようとする民衆レベルのマレー・イデオロギーのあらわれと考えることができる。

現在のタイ語を話すムスリムは、タイにおいてはイスラム教を信仰するタイ国民としてタイ国家に統合され、マレーシアではここ30年ほどの間にタイ語を放棄してマレー語化をすすめて完全なマレー人となろうとしており、全く別の方向へと進んでいる。周縁的エスニシティとしてのサムサムの記憶は標準タイ語を理解できず、書き言葉としてのタイ語を持たないマレーシア側のサムサムの中にこそとどめられている。周縁的エスニシティはマレーシアという国民国家のもとで制度的に固定化されることにより、実態的なサムサムの消失化の過程をたどっている。それはサムサムの変容の過程のみならずケダーにおけるマレー・エスニシティの変容の過程でもある。

バジョオのネットワーク—海の民の伝統化と周縁化——松澤 賢彦

本報告は、バジョオの「伝統化」と周縁化、そして、バジョオが海に広げたネットワークを中心に発表する。その際、インドネシア、東南スラウェシ州、ブトン県、鍛治屋列島にあるバジョオ集落滞在の記録をつきあわせつつ報告を行う。

バジョオと呼ばれる人々は、かつては船を家として、現在多くが海上に集落を形成し、海の暮らしに執着している。彼らの集落は東インドネシア、ボルネオ島、スルー諸島などに散在するが、小規模単位で集落を形成するために当該地域で民族上の少數者の立場に置かれる。「漂海民」「海の放浪者」として陸に住む住民から蔑まされることもある。

植民地化以前から、バジョオは海上に集落を形成し、遠洋航海、海賊など家船民では把握しきれない姿があった。ところが植民地支配が始まると「漂海民」像を裏付ける家船民、海上生活民に収斂、固定化していく。まず、この「伝統化」の過程を植民地支配との関連から検討をおこなう。バジョオが植民地支配を回避する活動を行った結果、植民地支配の側からは海の放浪者とされ、周縁の民となった。国民国家の時代も、取り残された人々として彼らの立場は変わらない。

しかし、各地に分散したバジョオ集団が取り残された人々でありながらも、海の民として「伝統」や統合性を維持できるのは、何よりもバジョオが海に張り巡らしたネットワークの存在である。鍛治屋列島のバジョオ諸集落を例に検討を加えるが、このネットワークの基本型はふたつの対なる旗（ウラ・ウラ）を持つ集団を母村とし、ふたつの母村が一対をなして結び付き、バジョオの部分社会を構成することにある。スラウェシ南部を範囲とすればバジョオのウラ・ウラ・ネットワークは重複する「母村一分村」関係が境界なく並存する状態となる。

シンポジウム報告要旨

ビルマの仏教

田村 克巳

ビルマにおいて上座部仏教は人々の行為を動気づけ、彼らの価値観、世界観をもたらしている。しかし、その教義は現象世界の否定に基礎を置いており、この世の現実を再構築することもないし、人々の社会関係を規定するものでもない。この意味で、現実にかかわる力の基盤としては「不完全」でしかない。そのため、仏教の周縁にあって、実践的仏教に浸透し、あるいは、それに併存、従属しつつ存在する宗教的な諸観念や諸行為がある。

伝統的な宗教観念と実践をめぐって、次のような異なる知識のカテゴリーがあると考えられる。すなわち、①精霊信仰をめぐる知識、多く女性によって担われ、劣位に置かれる。②呪術的実践と概念にかかわる知識、呪医・鍊金術師・ウェイザー weikza などに担われ、時にガイン gaing (sect) をつくるが、他の人々からアンビバレントなものとして位置付けられる。③僧侶の持つ仏教イデオロギー、最も高く価値づけられるが、現世世界から切り離されたものである。④功德を積む行為とそれをめぐる観念、男性優位の観念を内包しつつ、一般の人々に共有されている。③④は、スパイロ (Spiro, E.M.) のいう Nibbanic Buddhism と Kammatic Buddhism にそれぞれ対応するものであるが、いづれも力の行使の放棄または欠如を内包している。他方、①②は、力の行使を導くものである。また、精霊信仰や徳を積む行為は社会秩序を差異化する方向に向かうのに対して、他の 2 つのカテゴリーは、社会秩序の差異を超越する方向に向かう。

仏教イデオロギーに基づくビルマの王権は、②によって力の行使を正当化し、④によって民衆の支持を求めた。しかし、近代西欧世界との出会い、ことに科学性・合理性の観念の影響は、これらのカテゴリー相互を分離し、結果として仏教は、国民統合の力として「不完全さ」をよりあらわにするだけである。

タイ族と仏教—雲南南部の宗教問題

長谷川 清

東南アジア世界の上座仏教社会において、上座仏教は政治権力と相即不離の関係にあり、しばしば「国教」としての役割を果たしてきた。従って、上座仏教という組織宗教のイデオロギーと政治権力の相互関係を検討する場合、近代国家の形成に及ぼした影響、国民統合やナショナリズムとの関連などをめぐって議論が集中してきた観がある。この点は、タイにおける上座仏教が今なお、国王による支配の正当性の基盤をなし、国民統合の要となっている事実を見れば、勿論十分な根拠と正当性がある。こうした脈絡の中では、タイ族は上座仏教と密接不可分な存在（＝民族）の代名詞である。

しかしながら、スリランカから大陸東南アジア、雲南南部にまで広がる上座仏教圏全体を視野に入れる時、上座仏教が国家枠のドミナントな宗教体制ではなく、並存・

シンポジウム報告要旨

ビルマの仏教

田村 克巳

ビルマにおいて上座部仏教は人々の行為を動気づけ、彼らの価値観、世界観をもたらしている。しかし、その教義は現象世界の否定に基礎を置いており、この世の現実を再構築することもないし、人々の社会関係を規定するものでもない。この意味で、現実にかかわる力の基盤としては「不完全」でしかない。そのため、仏教の周縁にあって、実践的仏教に浸透し、あるいは、それに併存、従属しつつ存在する宗教的な諸観念や諸行為がある。

伝統的な宗教観念と実践をめぐって、次のような異なる知識のカテゴリーがあると考えられる。すなわち、①精霊信仰をめぐる知識、多く女性によって担われ、劣位に置かれる。②呪術的実践と概念にかかわる知識、呪医・鍊金術師・ウェイザー weikza などに担われ、時にガイン gaing (sect) をつくるが、他の人々からアンビバレントなものとして位置付けられる。③僧侶の持つ仏教イデオロギー、最も高く価値づけられるが、現世世界から切り離されたものである。④功德を積む行為とそれをめぐる観念、男性優位の観念を内包しつつ、一般の人々に共有されている。③④は、スパイロ (Spiro, E.M.) のいう Nibbanic Buddhism と Kammatic Buddhism にそれぞれ対応するものであるが、いづれも力の行使の放棄または欠如を内包している。他方、①②は、力の行使を導くものである。また、精霊信仰や徳を積む行為は社会秩序を差異化する方向に向かうのに対して、他の 2 つのカテゴリーは、社会秩序の差異を超越する方向に向かう。

仏教イデオロギーに基づくビルマの王権は、②によって力の行使を正当化し、④によって民衆の支持を求めた。しかし、近代西欧世界との出会い、ことに科学性・合理性の観念の影響は、これらのカテゴリー相互を分離し、結果として仏教は、国民統合の力として「不完全さ」をよりあらわにするだけである。

タイ族と仏教—雲南南部の宗教問題

長谷川 清

東南アジア世界の上座仏教社会において、上座仏教は政治権力と相即不離の関係にあり、しばしば「国教」としての役割を果たしてきた。従って、上座仏教という組織宗教のイデオロギーと政治権力の相互関係を検討する場合、近代国家の形成に及ぼした影響、国民統合やナショナリズムとの関連などをめぐって議論が集中してきた観がある。この点は、タイにおける上座仏教が今なお、国王による支配の正当性の基盤をなし、国民統合の要となっている事実を見れば、勿論十分な根拠と正当性がある。こうした脈絡の中では、タイ族は上座仏教と密接不可分な存在（＝民族）の代名詞である。

しかしながら、スリランカから大陸東南アジア、雲南南部にまで広がる上座仏教圏全体を視野に入れる時、上座仏教が国家枠のドミナントな宗教体制ではなく、並存・

競合しあう複数の大伝統の中の一つにすぎず、国家枠の周縁部に位置している場合もある。この報告で扱う中国・雲南省南部のタイ諸族はそうしたタイプに入る。ここでは少数民族の中に多くの信徒をかかえるイスラム教などと違い、中国という全体社会における位置は極めて周縁的なものとなっている。雲南南部では徳宏地区のタイ・ヌー (Tai Noe), タイ・タウ (Tai Taw), シプソンパンナー地区のタイ・ルー (Tai Lue)などのタイ諸族が上座仏教を信仰する。この報告では、中国革命の展開の中で彼らの上座仏教がいかなる変化を辿ってきたかをシプソンパンナーを中心に考察し、文化大革命の終了後に現れた宗教再生現象の持つ意味を検討する。

フィリピン・ムスリムの国民統合問題と宗教—1950-60年代におけるイスラームのネットワーク形成をめぐって——川島 總

本報告はムスリム住民の側からの国家や社会に対するはたらきかけという面に注目し、分離独立運動に先行する1950~60年代の時期に多くのイスラーム団体が設立され、フィリピン・ムスリムの組織化が進んだ現象や、国外のイスラーム世界—中東やマレー世界—との交流が盛んに行なわれた現象を実証的に検討し、こうした動きとフィリピン・ムスリムの政治運動との関係を考察する。

1950年代半ば、西洋式教育を受けた近代的ムスリム政治家が、ムスリムの権利擁護とイスラームの近代化を掲げる統合主義運動を開始したが、この運動の本質は、中上層出身で、フィリピンの「世俗主義」政治に同化した特權的ムスリムが、フィリピン・ムスリム全体の権益擁護という大義名分のもとで、自らの階層的利益を増進するために政府に圧力をかける運動であった。1960年代後半になると、新しいリーダー、即ち都市の急進的ムスリム青年と中東留学ウラマーが出現し、統合主義運動をその階層性とイデオロギーの両面から批判し、社会変革を訴えるようになった。統合主義運動の指導者は彼らへの批判をかわすために、以後、連邦主義、分離主義に傾斜していった。

戦後フィリピンにおいてイスラームが政治的活力を有するようになった要因としては、「世俗主義」原理のもとでイスラームが国家の統制から比較的自由であったこと、その中で近代的ムスリム政治家がフィリピン政治の多元的状況を巧みに利用して統合主義の要求を中央政府に受け入れさせることに成功したこと、その過程で国内外にイスラームのネットワークが形成され、その中で新しいタイプのリーダーが出現して体制批判勢力を形成するようになったことが重要である。分離独立運動の背後には、内部に多様な政治的、思想的潮流を包み込んだイスラーム運動の発展という大きな流れがあったといえる。

イスラーム教育と国民統合——西村 重夫

インドネシアとマレーシアの二か国をとりあげ、学校カリキュラムにおけるイスラーム教育の位置づけを比較することによって、宗教教育と国民統合の問題について考

競合しあう複数の大伝統の中の一つにすぎず、国家枠の周縁部に位置している場合もある。この報告で扱う中国・雲南省南部のタイ諸族はそうしたタイプに入る。ここでは少数民族の中に多くの信徒をかかえるイスラム教などと違い、中国という全体社会における位置は極めて周縁的なものとなっている。雲南南部では徳宏地区のタイ・ヌー (Tai Noe), タイ・タウ (Tai Taw), シプソンパンナー地区のタイ・ルー (Tai Lue)などのタイ諸族が上座仏教を信仰する。この報告では、中国革命の展開の中で彼らの上座仏教がいかなる変化を辿ってきたかをシプソンパンナーを中心に考察し、文化大革命の終了後に現れた宗教再生現象の持つ意味を検討する。

フィリピン・ムスリムの国民統合問題と宗教—1950-60年代におけるイスラームのネットワーク形成をめぐって——川島 總

本報告はムスリム住民の側からの国家や社会に対するはたらきかけという面に注目し、分離独立運動に先行する1950~60年代の時期に多くのイスラーム団体が設立され、フィリピン・ムスリムの組織化が進んだ現象や、国外のイスラーム世界—中東やマレー世界—との交流が盛んに行なわれた現象を実証的に検討し、こうした動きとフィリピン・ムスリムの政治運動との関係を考察する。

1950年代半ば、西洋式教育を受けた近代的ムスリム政治家が、ムスリムの権利擁護とイスラームの近代化を掲げる統合主義運動を開始したが、この運動の本質は、中上層出身で、フィリピンの「世俗主義」政治に同化した特權的ムスリムが、フィリピン・ムスリム全体の権益擁護という大義名分のもとで、自らの階層的利益を増進するために政府に圧力をかける運動であった。1960年代後半になると、新しいリーダー、即ち都市の急進的ムスリム青年と中東留学ウラマーが出現し、統合主義運動をその階層性とイデオロギーの両面から批判し、社会変革を訴えるようになった。統合主義運動の指導者は彼らへの批判をかわすために、以後、連邦主義、分離主義に傾斜していった。

戦後フィリピンにおいてイスラームが政治的活力を有するようになった要因としては、「世俗主義」原理のもとでイスラームが国家の統制から比較的自由であったこと、その中で近代的ムスリム政治家がフィリピン政治の多元的状況を巧みに利用して統合主義の要求を中央政府に受け入れさせることに成功したこと、その過程で国内外にイスラームのネットワークが形成され、その中で新しいタイプのリーダーが出現して体制批判勢力を形成するようになったことが重要である。分離独立運動の背後には、内部に多様な政治的、思想的潮流を包み込んだイスラーム運動の発展という大きな流れがあったといえる。

イスラーム教育と国民統合——西村 重夫

インドネシアとマレーシアの二か国をとりあげ、学校カリキュラムにおけるイスラーム教育の位置づけを比較することによって、宗教教育と国民統合の問題について考

競合しあう複数の大伝統の中の一つにすぎず、国家枠の周縁部に位置している場合もある。この報告で扱う中国・雲南省南部のタイ諸族はそうしたタイプに入る。ここでは少数民族の中に多くの信徒をかかえるイスラム教などと違い、中国という全体社会における位置は極めて周縁的なものとなっている。雲南南部では徳宏地区のタイ・ヌー (Tai Noe), タイ・タウ (Tai Taw), シプソンパンナー地区のタイ・ルー (Tai Lue)などのタイ諸族が上座仏教を信仰する。この報告では、中国革命の展開の中で彼らの上座仏教がいかなる変化を辿ってきたかをシプソンパンナーを中心に考察し、文化大革命の終了後に現れた宗教再生現象の持つ意味を検討する。

フィリピン・ムスリムの国民統合問題と宗教—1950-60年代におけるイスラームのネットワーク形成をめぐって——川島 總

本報告はムスリム住民の側からの国家や社会に対するはたらきかけという面に注目し、分離独立運動に先行する1950~60年代の時期に多くのイスラーム団体が設立され、フィリピン・ムスリムの組織化が進んだ現象や、国外のイスラーム世界—中東やマレー世界—との交流が盛んに行なわれた現象を実証的に検討し、こうした動きとフィリピン・ムスリムの政治運動との関係を考察する。

1950年代半ば、西洋式教育を受けた近代的ムスリム政治家が、ムスリムの権利擁護とイスラームの近代化を掲げる統合主義運動を開始したが、この運動の本質は、中上層出身で、フィリピンの「世俗主義」政治に同化した特權的ムスリムが、フィリピン・ムスリム全体の権益擁護という大義名分のもとで、自らの階層的利益を増進するために政府に圧力をかける運動であった。1960年代後半になると、新しいリーダー、即ち都市の急進的ムスリム青年と中東留学ウラマーが出現し、統合主義運動をその階層性とイデオロギーの両面から批判し、社会変革を訴えるようになった。統合主義運動の指導者は彼らへの批判をかわすために、以後、連邦主義、分離主義に傾斜していった。

戦後フィリピンにおいてイスラームが政治的活力を有するようになった要因としては、「世俗主義」原理のもとでイスラームが国家の統制から比較的自由であったこと、その中で近代的ムスリム政治家がフィリピン政治の多元的状況を巧みに利用して統合主義の要求を中央政府に受け入れさせることに成功したこと、その過程で国内外にイスラームのネットワークが形成され、その中で新しいタイプのリーダーが出現して体制批判勢力を形成するようになったことが重要である。分離独立運動の背後には、内部に多様な政治的、思想的潮流を包み込んだイスラーム運動の発展という大きな流れがあったといえる。

イスラーム教育と国民統合——西村 重夫

インドネシアとマレーシアの二か国をとりあげ、学校カリキュラムにおけるイスラーム教育の位置づけを比較することによって、宗教教育と国民統合の問題について考

えることにする。イスラーム教育を道徳教育との関係においてみると、両国の価値教育（宗教・道徳教育）のあいだに鮮やかなコントラストが認められる。

インドネシアでは、宗教教育と道徳教育が両方とも、すべての教育段階における必修の基礎教科とされている。イスラーム教育は、宗教教育の中の一つの選択肢であり、児童生徒は、各自の信仰に応じて、イスラーム教育のほか、プロテstant教育、カトリック教育、ヒンドゥー教教育、仏教教育を受ける自由をもつ。道徳教育は「パンチャシラ道徳教育」とよばれ、そこでは、パンチャシラの第一原則「唯一神への信仰」にもとづき、信教の自由と宗教の多様性の尊重が強調される。イスラーム教育は、建国五原則パンチャシラに立脚する宗教教育のうちの一本の柱なのである。

一方、マレーシアの学校カリキュラムにおける宗教教育と道徳教育は、選択必修教科である。イスラームを国教とするマレーシアでは、宗教教育がそのままでイスラーム教育を意味する。ムスリムの児童生徒は、宗教教育すなわちイスラーム教育を受けるが、ムスリムでない児童生徒には、宗教的中立性にもとづく道徳教育が課せられる。イスラーム教育が価値教育の中核をなすものの、対象がムスリムに限られており、それを補完するために道徳教育が成立した経緯が認められるのである。

イスラーム教育をめぐる対照的な取り組み方は、国民統合の方向性の違いを如実に物語る。両国における価値教育の相違点が生みだされた背景を歴史的にさぐることによって、インドネシア人の育成、マレーシア人の育成について論じてみたい。

伝統というパラドックス一分類体系の国家的起源——福島 真人

宗教、伝統、文化といった諸概念は、当事者にとって殆ど自明であるが故に意識化されない一連の慣習的・ドクサ体系と、それが問題化され、人々の理論的係争の領域に達するに到ったレベルの両方を含んでいる。とりわけ近代国家による法的概念の形式的整備化は、この係争の領域に、ある固有の分類体系（その多くはしばしば、文化、あるいは宗教という名の下に形成される）を押しつける事になる。ここで問題なのは、ここで形成された国家的概念体系が、その意味論的な構成の一部を人々のドクサ体系そのものに依存している一方、その依存の仕方が不十分で、常に非明示的なドクサ体系との間に齟齬を来すという点なのである。こうした齟齬は、ドクサ体系に対して、ある種の独特な反省的な眼差しを当事者に要求し、思わぬ方向へとドクサ体系を明示化、再編成するといった可能性を常に持っている。だから一方では国家主導で宗教、文化、伝統という概念が定義され、それによって法、教育その他のシステムが徐々に完備されていき、当然こうした概念の整備自体が日常的語用論に影響を与える一方で、その過程自身によって、ドクサ体系の一部が、逆にそうした公的定義との違和感を先鋭化する事すら可能なのである。

問題はこのプロセスが決して一元的ではないという点にある。いいかえれば我々の膨大なドクサ体系のどの部分が係争化・問題化され、それが明確な概念的指標を与えられるかは、その歴史的状況に大きく依存し、単純な一般化を許さないのである。だ

えることにする。イスラーム教育を道徳教育との関係においてみると、両国の価値教育（宗教・道徳教育）のあいだに鮮やかなコントラストが認められる。

インドネシアでは、宗教教育と道徳教育が両方とも、すべての教育段階における必修の基礎教科とされている。イスラーム教育は、宗教教育の中の一つの選択肢であり、児童生徒は、各自の信仰に応じて、イスラーム教育のほか、プロテstant教育、カトリック教育、ヒンドゥー教教育、仏教教育を受ける自由をもつ。道徳教育は「パンチャシラ道徳教育」とよばれ、そこでは、パンチャシラの第一原則「唯一神への信仰」にもとづき、信教の自由と宗教の多様性の尊重が強調される。イスラーム教育は、建国五原則パンチャシラに立脚する宗教教育のうちの一本の柱なのである。

一方、マレーシアの学校カリキュラムにおける宗教教育と道徳教育は、選択必修教科である。イスラームを国教とするマレーシアでは、宗教教育がそのままでイスラーム教育を意味する。ムスリムの児童生徒は、宗教教育すなわちイスラーム教育を受けるが、ムスリムでない児童生徒には、宗教的中立性にもとづく道徳教育が課せられる。イスラーム教育が価値教育の中核をなすものの、対象がムスリムに限られており、それを補完するために道徳教育が成立した経緯が認められるのである。

イスラーム教育をめぐる対照的な取り組み方は、国民統合の方向性の違いを如実に物語る。両国における価値教育の相違点が生みだされた背景を歴史的にさぐることによって、インドネシア人の育成、マレーシア人の育成について論じてみたい。

伝統というパラドックス一分類体系の国家的起源——福島 真人

宗教、伝統、文化といった諸概念は、当事者にとって殆ど自明であるが故に意識化されない一連の慣習的・ドクサ体系と、それが問題化され、人々の理論的係争の領域に達するに到ったレベルの両方を含んでいる。とりわけ近代国家による法的概念の形式的整備化は、この係争の領域に、ある固有の分類体系（その多くはしばしば、文化、あるいは宗教という名の下に形成される）を押しつける事になる。ここで問題なのは、ここで形成された国家的概念体系が、その意味論的な構成の一部を人々のドクサ体系そのものに依存している一方、その依存の仕方が不十分で、常に非明示的なドクサ体系との間に齟齬を来すという点なのである。こうした齟齬は、ドクサ体系に対して、ある種の独特な反省的な眼差しを当事者に要求し、思わぬ方向へとドクサ体系を明示化、再編成するといった可能性を常に持っている。だから一方では国家主導で宗教、文化、伝統という概念が定義され、それによって法、教育その他のシステムが徐々に完備されていき、当然こうした概念の整備自体が日常的語用論に影響を与える一方で、その過程自身によって、ドクサ体系の一部が、逆にそうした公的定義との違和感を先鋭化する事すら可能なのである。

問題はこのプロセスが決して一元的ではないという点にある。いいかえれば我々の膨大なドクサ体系のどの部分が係争化・問題化され、それが明確な概念的指標を与えられるかは、その歴史的状況に大きく依存し、単純な一般化を許さないのである。だ

が少なくとも、宗教や国民文化の公的生成が、人々のドクサ体系の一元的均等化をもたらし云々といった単純な図式が眉唾であるという事だけは確かであろう。

伝統その他の概念は、こうした形で常に慣習化と問題化の両面に分岐する不安定な秩序を構成している。それゆえ当事者が伝統と呼ぶシステムは、おかげすくなれ、こうした係争化の過程で、自覚化されるようになつたドクサ体系の名残であり、伝統という概念の持つパラドクシカルな性格とは、ちょうど夢の研究に似て、それがそう名付けられる為には、人は目を覚まさざるを得ず、覚醒した後では、夢は既に過去のものになっているという事態と似たものなのである。

特別講演要旨

National Integration of the Orang Asli in the Malaysian Islamic Context

Hood Mohamad Salleh

The lecture was primarily concerned with how the small indigenous communities of aborigines (*Orang Asli*) of peninsular Malaysia have responded to attempts of the Government to integrate them into the wider national society. In order to avoid any misunderstanding of the actual situation, it was first suggested that the lecture was more focussed on the question of religions of the Orang Asli as religions of a peripheralised community and what this meant in the context of the contemporary developing Malaysian nation. It was noted that Malaysia was not an Islamic state in the proper sense, although Islam continues to be the official state religion.

Since gaining independence, the primary aim of the Malaysian government had been to integrate Orang Asli into the mainstream national economy, mainly because of the reason that, as a population (82,000 people: 1991 survey) they were widely dispersed (18 named ethnic groups, speaking some 12 different languages, some of Mon Khmer and some of Austronesian origins) and are economically disadvantaged. It was stated that as a community a relatively small part of the national budget is and had been allocated to Orang Asli.

In order to appreciate their present situation and identity, one has to look at some historical facts which had directly influenced official policy towards them. For the purpose of the lecture, five 'stages' of historical development were identified. *First*, the colonial period when attitudes towards them as gentle, peace-loving but vulnerable people resulted in their being "screened off" from traumatic interference from the outside world. There were thus looked upon more as "noble savages" than people capable of deciding anything for themselves. *Second*, the period of insurgency in the jungle where they live (the 'Emergency Period' of 1948-1960) was a time of great uncertainty and which culminated in

が少なくとも、宗教や国民文化の公的生成が、人々のドクサ体系の一元的均等化をもたらし云々といった単純な図式が眉唾であるという事だけは確かであろう。

伝統その他の概念は、こうした形で常に慣習化と問題化の両面に分岐する不安定な秩序を構成している。それゆえ当事者が伝統と呼ぶシステムは、おかげすくなれ、こうした係争化の過程で、自覚化されるようになつたドクサ体系の名残であり、伝統という概念の持つパラドクシカルな性格とは、ちょうど夢の研究に似て、それがそう名付けられる為には、人は目を覚まさざるを得ず、覚醒した後では、夢は既に過去のものになっているという事態と似たものなのである。

特別講演要旨

National Integration of the Orang Asli in the Malaysian Islamic Context

Hood Mohamad Salleh

The lecture was primarily concerned with how the small indigenous communities of aborigines (*Orang Asli*) of peninsular Malaysia have responded to attempts of the Government to integrate them into the wider national society. In order to avoid any misunderstanding of the actual situation, it was first suggested that the lecture was more focussed on the question of religions of the Orang Asli as religions of a peripheralised community and what this meant in the context of the contemporary developing Malaysian nation. It was noted that Malaysia was not an Islamic state in the proper sense, although Islam continues to be the official state religion.

Since gaining independence, the primary aim of the Malaysian government had been to integrate Orang Asli into the mainstream national economy, mainly because of the reason that, as a population (82,000 people: 1991 survey) they were widely dispersed (18 named ethnic groups, speaking some 12 different languages, some of Mon Khmer and some of Austronesian origins) and are economically disadvantaged. It was stated that as a community a relatively small part of the national budget is and had been allocated to Orang Asli.

In order to appreciate their present situation and identity, one has to look at some historical facts which had directly influenced official policy towards them. For the purpose of the lecture, five 'stages' of historical development were identified. *First*, the colonial period when attitudes towards them as gentle, peace-loving but vulnerable people resulted in their being "screened off" from traumatic interference from the outside world. There were thus looked upon more as "noble savages" than people capable of deciding anything for themselves. *Second*, the period of insurgency in the jungle where they live (the 'Emergency Period' of 1948-1960) was a time of great uncertainty and which culminated in

Orang Asli being administered under a Department of Aboriginal Affairs created through the Aboriginal Peoples Act of 1954 (*Act 134*). The *third* stage (just after Independence in 1957) did not improve the Orang Asli situation since this coincided with the stage of political transition and self government for the country. The status of Orang Asli remained uncertain. During the *fourth* stage (1970s-1980s), there were attempts to convert Orang Asli through various government agencies into Islam but the issue of "land rights" and how best to administer them presented problems which were difficult for the government to solve. The *fifth* stage (1980s to the present) underlined further the difficulties involved in integration. Reasons for Orang Asli rejection of government policy as well as why some Orang Asli did respond to it was discussed.

資料・研究短報

日本輸出陶磁バンテン国際セミナー（1992年10月15日～19日）に 参加して——青柳 洋治

インドネシア西部ジャワのバンテンは、16～19世紀初頭まで島嶼部東南アジアの貿易とイスラム化的一大拠点であった。かつての栄華と変わらないものは、白い尖塔で知られるイスラム大寺院への巡礼者たちのにぎわいだけで、ほかは王宮を始めとして全て廃墟となってしまっている。

1976年以来継続されているこの遺跡の発掘調査の中で、日本の肥前陶磁が中国陶磁やタイ・ベトナム陶磁と共に大量に出土していることは、少なからず報告されている。16世紀末にオランダ人を東南アジアで初めて迎え入れて以来、領域内のバタヴィア(スンダクラバ)を略取され、そしてオランダとの度重なる戦いの末、結局は破壊されてしまったこの都で、我が肥前の陶磁器が出土していることは、日本とインドネシアとの関係史を研究するうえで貴重な資料となっている。

このような港市国家バンテンの遺跡博物館で、インドネシア国立考古学研究センター主催、セラン県地方政府と日本の国際交流基金などの協力によってこのセミナーは催された。

発表者は、地元のインドネシア以外に日本・イギリス・フランス・タイの各国の研究者が加わり、次のように広く貿易陶磁全体とバンテン王国の文献研究をも含むものであった。

(敬称略)

〈第一セッション〉(司会 E・エドワーズ・マッキンノン)

1. ベトナム中部ホイアン遺跡出土の陶磁片について(長谷部 楽爾)
2. 東南アジア島嶼部出土のベトナム陶磁(筆者)

Orang Asli being administered under a Department of Aboriginal Affairs created through the Aboriginal Peoples Act of 1954 (*Act 134*). The *third* stage (just after Independence in 1957) did not improve the Orang Asli situation since this coincided with the stage of political transition and self government for the country. The status of Orang Asli remained uncertain. During the *fourth* stage (1970s-1980s), there were attempts to convert Orang Asli through various government agencies into Islam but the issue of "land rights" and how best to administer them presented problems which were difficult for the government to solve. The *fifth* stage (1980s to the present) underlined further the difficulties involved in integration. Reasons for Orang Asli rejection of government policy as well as why some Orang Asli did respond to it was discussed.

資料・研究短報

日本輸出陶磁バンテン国際セミナー（1992年10月15日～19日）に 参加して——青柳 洋治

インドネシア西部ジャワのバンテンは、16～19世紀初頭まで島嶼部東南アジアの貿易とイスラム化的一大拠点であった。かつての栄華と変わらないものは、白い尖塔で知られるイスラム大寺院への巡礼者たちのにぎわいだけで、ほかは王宮を始めとして全て廃墟となってしまっている。

1976年以来継続されているこの遺跡の発掘調査の中で、日本の肥前陶磁が中国陶磁やタイ・ベトナム陶磁と共に大量に出土していることは、少なからず報告されている。16世紀末にオランダ人を東南アジアで初めて迎え入れて以来、領域内のバタヴィア(スンダクラバ)を略取され、そしてオランダとの度重なる戦いの末、結局は破壊されてしまったこの都で、我が肥前の陶磁器が出土していることは、日本とインドネシアとの関係史を研究するうえで貴重な資料となっている。

このような港市国家バンテンの遺跡博物館で、インドネシア国立考古学研究センター主催、セラン県地方政府と日本の国際交流基金などの協力によってこのセミナーは催された。

発表者は、地元のインドネシア以外に日本・イギリス・フランス・タイの各国の研究者が加わり、次のように広く貿易陶磁全体とバンテン王国の文献研究をも含むものであった。

(敬称略)

〈第一セッション〉(司会 E・エドワーズ・マッキンノン)

1. ベトナム中部ホイアン遺跡出土の陶磁片について(長谷部 楽爾)
2. 東南アジア島嶼部出土のベトナム陶磁(筆者)

3. 中部ラムプンのイスラム墓出土の肥前青磁皿 (E・エドワーズ・マッキンノン)
4. カリマンタンの古代を探る唐代陶磁 (アバー・リド)

口火を切った日本参加者の長谷部団長の1はベトナム出土の肥前陶磁の報告である。

〈第2セッション〉(司会 坂井 隆)

5. バンテン・ラーマ考古資料の日本陶磁識別問題 (ハルワニ・ミクロブ)
6. インドネシア・タイ出土の肥前陶磁の特質 (大橋 康二)
7. 海を渡った肥前のやきもの (前山 博)

本セミナーの中心的なテーマが集ったここでは、6を中心 중국陶磁と肥前陶磁の識別方法へ質問が集中した。7は文献上の輸出記録の詳細な紹介で、大きな関心をよんだ。



〈第3セッション〉(司会 ハルワニ・ミクロブ)

8. スリブルー諸島海域発見の陶磁器 (ウイディアティ)
9. 16, 17世紀の陶磁器に見られるアラビア文字装飾 (エコワティ・スンダリ)
10. 東南アジアと日本の中国染付の比較と位置づけ (小野 正敏)

〈第4セッション〉(司会 ハッサン・アムバリイ)

11. バンテン・ギラン考古・歴史調査成果 (バンテン・ギラン調査団)
12. 肥前陶磁の輸出と鄭氏・バンテン王国 (坂井 隆)

バンテン・ギラン遺跡について、都市の性格に関して主に日本研究者からの質問が続いた。

〈第5セッション〉(司会 クロード・ギオー)

13. タイの考古資料に見られる日本陶磁 (ペンサック・ホウィツ)
14. 考古資料によるインドネシア陶磁貿易研究 (ロニー・S, ナニッ・H)
15. 文献研究による16, 17世紀のバンテン市の発達 (生田 澄)
16. バンテンと周辺での日本陶磁貿易に関する中国人商人の役割 (ヘリヤンティ・O)

15は司会のギオー氏 (バンテン・ギラン調査フランス責任者) とテーマが重って活発な議論が展開した。



使用言語は、インドネシア語と日本語そして英語であったが、インドネシア語に堪能な坂井氏の通訳によって、相互理解が大いに助けられたことは特筆しておきたい。

途中第2日は、イスラム教礼拝日の金曜のこともあり、ラーマとギランの両遺跡の発掘現場の見学にあてられ、実際にそれぞれの遺跡の調査状況を見ることができた。また終了後に立ち寄ったティルタヤサ遺跡で大量の肥前陶磁片を、小学生たちと共に採集できたことは、この遺跡（離宮址）の発掘調査の必要性を強く訴えることにもなった。

今回のセミナーは、関係各方面の努力によって実施できた、そのことの意義も大きい。そして終了後、センターのエリアワティ研究員が半年間の日本の研修に出発したこととも含めて、今後の広範な研究交流に大きく寄与することと思われる。

(連絡先：〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学アジア文化研究所 TEL
03-3238-3697)

日本・東南アジア関係史研究の最近の潮流—シンポジウム等参加報告—

後藤 乾一

第二次世界大戦期を中心とする日本・東南アジア関係（史）は、1994年秋に開催予定のIAHA（国際アジア歴史学者会議）でも課題の一つにあげられていることからもうかがえるように、近年内外の学問的関心を集めているテーマといえよう。とくに1991年は太平洋戦争勃発50周年ということもあり、日本と近隣アジア諸国との関係についての会議やシンポジウムが世界各地で開催された。筆者もこうしたテーマについてのいくつかの会合に参加の機会を与えられたが、ここではこれらの会合の模様や個人的な印象等をごく手短かに紹介してみたい。

1. Japanese Cultural Policies in Southeast Asia during World War 2. これは1989年3月、ワシントンD.C.で開かれたAAS（Association of Asian Studies、米国アジア学会）のパネルの一つとして、日本近代史研究、日比関係史研究で知られるカンサス大学のGrant Goodman氏が組織したもので、日本にも知己の多いWilliam Frederick氏（オハイオ州大、インドネシア研究）、Bruce Reynolds氏（サンホセ州大、タイ研究）、そして日本からは明石陽至氏、寺見元恵氏（都合によりペーパー代読）、私が参加した。従来の東南アジアにおける日本軍政研究において見落とされがちであった日本の「文化政策」をとりあげ（主として教育、宣伝活動）、その立案・実施過程、それがもたらした影響、その限界などが論議された。提出ペーパーは、パネルでの質疑応答さらにはGoodman氏の細部にわたるコメントをもとにいすれもかなりの補筆がなされ、また該テーマに密接な関わりのある研究を完成させていた倉沢愛子氏の「ジャワにおける宣伝映画」についての論考を得た上で、1991年秋、米国St. Martin Press社から会議と同名の書物として公刊された。

2. Japanese War-time Empire in Asia, 1937～45（於スタンフォード大学フーバー研究所、1991年8月）この会議はPeter Duus氏（スタンフォード大）、Ramon Meyers氏（フーバー研究所）、Mark Peattie氏（マサチューセッツ州大）を組織者とするシンポジウムであり、近代日本・アジア関係を時代順に考察した前二回の会議の延長であり、かつそのしめくくりをなすものである。対中関係を主題とした第二回会議の成果は、上記三人の編で、*The Japanese Informal Empire in China*としてプリンストン大学出版会から上梓され、世界の日本近代史とくに帝国主義研究に大きなインパクトを与えたことは周知のとおりである。今回の会議は、日中戦争・太平洋戦争期を主対象としつつも、前史として満州事変以降の30年代史、さらには日本の「戦時帝国」が戦後アジアの政治経済秩序へ与えた影響まで議論の対象とされた。東南アジアに関するものは、筆者の“Co-option, Collaboration and Suppression of Indigenous Elites of Southeast Asia in the War-time Empire”のみであったが、朝鮮に関する

(連絡先：〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学アジア文化研究所 TEL
03-3238-3697)

日本・東南アジア関係史研究の最近の潮流—シンポジウム等参加報告—

後藤 乾一

第二次世界大戦期を中心とする日本・東南アジア関係（史）は、1994年秋に開催予定のIAHA（国際アジア歴史学者会議）でも課題の一つにあげられていることからもうかがえるように、近年内外の学問的関心を集めているテーマといえよう。とくに1991年は太平洋戦争勃発50周年ということもあり、日本と近隣アジア諸国との関係についての会議やシンポジウムが世界各地で開催された。筆者もこうしたテーマについてのいくつかの会合に参加の機会を与えられたが、ここではこれらの会合の模様や個人的な印象等をごく手短かに紹介してみたい。

1. Japanese Cultural Policies in Southeast Asia during World War 2. これは1989年3月、ワシントンD.C.で開かれたAAS（Association of Asian Studies、米国アジア学会）のパネルの一つとして、日本近代史研究、日比関係史研究で知られるカンサス大学のGrant Goodman氏が組織したもので、日本にも知己の多いWilliam Frederick氏（オハイオ州大、インドネシア研究）、Bruce Reynolds氏（サンホセ州大、タイ研究）、そして日本からは明石陽至氏、寺見元恵氏（都合によりペーパー代読）、私が参加した。従来の東南アジアにおける日本軍政研究において見落とされがちであった日本の「文化政策」をとりあげ（主として教育、宣伝活動）、その立案・実施過程、それがもたらした影響、その限界などが論議された。提出ペーパーは、パネルでの質疑応答さらにはGoodman氏の細部にわたるコメントをもとにいすれもかなりの補筆がなされ、また該テーマに密接な関わりのある研究を完成させていた倉沢愛子氏の「ジャワにおける宣伝映画」についての論考を得た上で、1991年秋、米国St. Martin Press社から会議と同名の書物として公刊された。

2. Japanese War-time Empire in Asia, 1937～45（於スタンフォード大学フーバー研究所、1991年8月）この会議はPeter Duus氏（スタンフォード大）、Ramon Meyers氏（フーバー研究所）、Mark Peattie氏（マサチューセッツ州大）を組織者とするシンポジウムであり、近代日本・アジア関係を時代順に考察した前二回の会議の延長であり、かつそのしめくくりをなすものである。対中関係を主題とした第二回会議の成果は、上記三人の編で、*The Japanese Informal Empire in China*としてプリンストン大学出版会から上梓され、世界の日本近代史とくに帝国主義研究に大きなインパクトを与えたことは周知のとおりである。今回の会議は、日中戦争・太平洋戦争期を主対象としつつも、前史として満州事変以降の30年代史、さらには日本の「戦時帝国」が戦後アジアの政治経済秩序へ与えた影響まで議論の対象とされた。東南アジアに関するものは、筆者の“Co-option, Collaboration and Suppression of Indigenous Elites of Southeast Asia in the War-time Empire”のみであったが、朝鮮に関する

Carter Eckert 氏(ハーバード大)の“Total war, Industrialization and Social Change in Late Colonial Korea”, 台湾を主とした Wan-yao Chou 夫人(ブリティッシュ・コロンビア大)の “The Kominka Movement in Taiwan and Korea”, そして日本政治史に関わる Duus 氏, Peattie 氏らの報告, 日本経済史家の立場からの中村隆英氏, 小林英夫氏らの意欲的な報告が相次ぎ, 筆者としては日本の東南アジア支配を他のアジア諸地域における支配の比較において捉え, さらに日本の南進を近代史の構造それ自体との関連で理解する上できわめて刺激的であった。なお本シンポジウムの成果も 93 年中に前回と同じくプリンストン大学出版会から刊行される(この内 Duus 報告の骨子は「植民地なき帝国主義—『大東亜共栄圏』の構想」として『思想』92 年 4 月号に収録)。

3.50 Years after—The Pacific War Re-examined(別名「山中湖会議」, 国際文化会館主催, 1991 年 11 月), 会議名が示すように, 開戦 50 周年を契機に開かれた本シンポジウムは, その 20 年前の日米河口湖会議の延長上にあるもので, 当時未公開だった各国の一次史料がかなり利用可能となったこと, 中国, ソ連の研究者の参加が可能となったことなどを背景に, 太平洋戦争をより立体的, 多角的に考察せんとの意図で開かれたものである(細谷千博「太平洋戦争 50 年」『思想』1992 年 4 月参照)。日本, 欧米, アジア・太平洋諸国からの約 40 人の参加者を得て四日間にわたり開かれたこの会議は, 全体が九セッションに別れ, その内東南アジアに関連するのは, 「戦争の衝撃と遺産(3)」と題した最後のセッションであった(ちなみにその(1)(2)は, それぞれ日本帝国圏, 中国)。

ここでは Rico Jose 氏(フィリピン大学)とインドネシアについて私が報告した(コメントーターはロンドン大学の Ian Nish 氏)。両国はそれぞれ開戦当初は日本を侵略者, 解放者とみ, また復帰する米国, オランダをそれぞれ解放者, 侵略者視するというように対照的な時代対応をみせたわけだが, 両報告とも日本時代とはいかななる内実, 意味をもった時代であり, かつそれが今日どう両国で思想化されているかの観点からなされた。討論においてはあわせて日本における戦争評価の問題も取り上げられ,(旧)連合国側の研究者多数の発言もあったため筆者には考えさせられることの多いシンポジウムであった。なお本シンポジウムの成果も, 93 年中に日本語版は東大出版会, 英語版はコロンビア大学出版会から公刊されることになっている。

4.Modern Indonesian History—Reviewed in International Context (LIPI インドネシア科学院主催, 1992 年 3 月), 日本がインドネシアで軍政を開始した三月九日に開幕した本シンポジウムは, 軍政期そのものを対象としたものであるが, 日本政府当局への“気がね”も一因となり上記のようなあいまいなタイトルとなった。LIPI の上級研究員で高名な歴史学者の Taufik Abdullah 氏, A.B. Lapian 氏らを中心に準備された本会議は, 特定テーマをめぐるというより, 軍政期の諸問題を複眼的に捉えようとする観点から社会経済史を中心に多岐にわたるテーマが論じられた。また研究者ののみならずその時代を生きた長老知識人の体験談の報告という興味深い企画もなされた(社会学者 Selo Soemardjan 氏, ジャーナリスト Rosihan Anwar 氏など)。

会議にはインドネシア側からは、上記の人々の他 Abdurrahman 氏(LIPI), Soetopo Soesanto 氏(インドネシア大学)等、アメリカからは William Frederick 氏、オーストラリアからは Anthony Reid 氏(オーストラリア国立大), Anton Lucas 氏(モナシュ大)、そして日本からは倉沢愛子氏、南家三津子氏(一橋大大学院)および私が出席した。三日間、和気あいあいな雰囲気ながらも、終始きわめて客観的で密度の濃い報告と討論がなされ、あるいはインドネシア側から相当批判的な意見も出るのではないかと覚悟していた日本側出席者にとってはやや意外な感がなきにしもあらずであった。(なお本会議については、Reid 氏が Echousea [Economic History of Southeast Asia] Newsletter, April 1992 で報告されている)。また最終日には、軍政期研究をめぐる史料状況についてのセッションも設けられ、これには「インドネシア日本占領期史料フォーラム」の日本側上記三名の他、所用でジャカルタ滞在中の本学会会員寺田勇文氏、早瀬晋三氏も参加され、「日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム」の精力的な活動について、きわめて整理された報告がなされた。また、この最後の点との関連で付言するならば、93年9月インドネシア国立文書館の企画で、ASEAN 口承史コロキウム「東南アジアにおける日本軍政」が予定されている。

以上、点と点をつなぐ形ではあるが、近年の日本・東南アジア関係史研究の流れの一端について紹介させて頂いた。なお該テーマについての最近の日本での出版も盛んであり、共同研究の成果のみをみても以下のような著作があることも改めて記しておきたい。池端雪浦・寺見元恵・早瀬晋三『世紀転換期における日本フィリピン関係』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1989年、矢野暢編『講座東南アジア学⑩』弘文堂、1991年、吉川利治編『近現代史の中の日本と東南アジア』東京書籍、1992年。また全8巻で現在刊行中の岩波講座『近代日本と植民地』も合計89点の論文中、東南アジア(および南洋群島)関係が20点収録されていることもあわせて指摘しておきたい。

地区例会・研究会活動状況

中国・四国地区

植村 泰夫

SEAF 研究会

1992年12月12日 (於 広島大学総合科学部)

伊野 憲治氏 (北九州大学)

「ミャンマー民主化運動下の民衆像」

1993年2月20日 (於 広島大学文学部)

スコチョ氏 (ディポネゴロ大学)

「インドネシアの大学教育」

関西地区 ————— 深見 純生・八尾 隆生

1992年10月から1993年3月までの関西例会は、10月を除いて従来どおり摂南大学で開催され(2時半～5時半)，以下のような話題が提供された。参加者数は20名前後から30名前後である。

1992年10月17日 (会場：千里ライフサイエンスセンター)

石澤良昭(上智大学)「アンコール遺跡学術調査報告：第一次から第八次調査まで」

1992年11月7日

遠藤正之(上智大学・院)「10～15世紀のチャンバー：国家と対外関係」

1992年12月19日

永井史男(京都大学・院)「タイ国チャクリー改革の地政学：19世紀シャムにおける植民地型近代化の受容と展開」

1993年1月23日

大橋厚子(橘女子大・非常勤)「植民地文書から抜け出る方法：植民地期ジャワに関する社会経済史研究の歩み」

1993年2月13日

澤田英夫(京都大学・院)「現代口語ビルマ語にみる『場所』の概念」

1993年3月27日

青山 亨「叙事詩・予言・年代記：古典ジャワ文学と歴史叙述のファジーな関係」

中部地区 ————— 伊東 利勝

中部地区では、南山大学の援助を受け、同大学を会場にして研究会を開催している。活動が毎月、第3もしくは第4土曜日に定着することを目標にしている。最近は一般の人々の参加が、東南アジア史学会会員をしのぎつつある。出席者は毎回15～20名程度であり、今後とも多彩な発表者やテーマをお願いすることにより、会の充実をはかってゆきたい。さしあたり7月まではカラユキさん問題を予定している。1992年10月以降の活動状況は以下の通り。

1992年10月31日 ミン・ニョウ(名古屋大学大学院)

19世紀中期コンバウン朝ビルマの政治形態

11月21日 プラサート・ジッティワタナポーン

(タマサート大学政治学部)

タイの議会制民主主義の諸問題

1993年2月5日 石澤良昭(上智大学アジア文化研究所)

アンコール・ワットの技術者たち

3月27日 清水 洋(名古屋商科大学)

蘭領東印度のからゆきさん—19世紀末～1930年—

4月17日 ジェームス・F・ワーレン(マードック大学)

シンガポールにおける阿姑とカラユキさん—彼女たちの生活—

関東地区

嶋尾 槱

関東例会は、東京大学山上会館地下の会議室において毎月最終土曜日午後2時半から開催している。昨年10月以降の例会の報告者と論題は以下の通りである。

10月24日 今村啓爾氏 「ベトナム・ランバック遺跡の調査について—ドンソン文化を中心に」

11月28日 加治 明氏 「タイ系諸族の土着信仰について—ラオスのラオ族を中心」

1月23日 奥平龍二氏 「コンバウン朝ビルマの成立と成文法『マヌチエ・ダマタッ』の編纂—第一篇「王権神話」の創作をめぐって」

2月27日 石井米雄氏 「〈プラクラン〉をめぐって：『歴代宝案』と『三印法典』」
なお、新たに関東例会の毎月の案内を希望される方は、郵便振替で〔東京 0-167389
東南アジア史学会関東部会〕まで年通信費600円をお振り込みください。

事務局からのお願い

『会報』の内容充実のため、資料・研究短報欄へご寄稿下さい

新資料に関する情報、探究資料の公開検索、内外での研究集会に関する情報や紹介（但し、本学会の組織とは直接関係なく、かつ恒常に運営されている研究会の年次報告に類するものはご遠慮下さい）、特定分野にかかる内外の新しい研究動向など、二千字程度を目処にお纏め頂き、事務局宛ご送付下さい。毎年2月末と8月末に締め切り、それぞれ5月及び11月発行の『会報』に掲載させて頂きます。

住所変更等につきましては、書面にてすみやかに事務局宛ご一報下さい。

「転居先不明」は会誌『東南アジア歴史と文化』『会報』その他各種の送付に支障をきたすことになります。ご面倒ながら、転居、転勤などの通知先に、本学会事務局も加えて頂きますようお願い申し上げます。

東南アジア史学会会報 第58号

1993年5月 発行

発行者 東南アジア史学会（会長 石澤良昭）
住所 〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学アジア文化研究所気付
電話 03-3238-3697 FAX 03-3238-3690
郵便振替 東京4-754665 東南アジア史学会
